ミナミの回遊創出による　地域活性化シンポジウム　～2025 大阪・開催万博に向けて～

日時：令和五年三月二九日（水）
場所：なんばパークス・パークスタワー7階Ｂ会議室　＋オンライン中継（ＺＯＯＭ）

エリア内に人の回遊や滞留を創り出し、データで検証しながら地域全体の活性化につなげる試みが、全国で、そしてミナミでも始まっています。そこで、地域の商店街や大学、市やエリマネ団体などが連携するこの取り組みを、御堂筋の社会実験で蓄積したデータの紹介や専門家のお話を通じて学ぶシンポジウムを開催いたしました。

絹原　ただ今より「ミナミの回遊創出による地域活性化シンポジウム～2025 大阪・関西万博に向けて～」を開会いたします。

私は本日司会進行を務めます、主催者の「御堂筋沿道・道頓堀以南区間整備協議会」の事務局であり、「一般社団法人ミナミ御堂筋の会」事務局の絹原と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は2部制となっておりまして、前半は地域の皆様や大学、それから大阪市、エリマネ団体が連携する回遊創出への取り組みを学ぶシンポジウム、後半は御堂筋などを対象にデータ分析をいただいた大学、企業の皆さまによるプレゼンテーションとなっております。

では、最初に主催者を代表いたしまして、大阪公立大学教授、御堂筋協議会の座長をお務めいただいております嘉名光市先生にご挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

◆　開催に寄せて

大阪公立大学教授・御堂筋協議会座長　嘉名　光市　先生

皆さん、こんにちは。大阪公立大学というよりは、今日は御堂筋協議会の座長ということでご挨拶させていただきます。大阪公立大学・御堂筋協議会座長の嘉名でございます。よろしくお願いいたします。

今日は「ミナミの回遊創出による地域活性化シンポジウム」ということで、皆さんに発表していただくように考えております。

この間、行政の皆さんで御堂筋の空間再編をしていただいており、それから地元商店街の皆さん、あるいはまちづくり団体の皆さんで地域活性化の提言であるとか、いろいろなデータも取っていただいています。それから、私たち大阪公立大学も地域の皆さんと一緒に

なって様々な調査研究を行っておりますので、今日はそれらを一旦棚卸して、これからミナミの活性化に向けた将来像を皆さんと一緒に議論できればと思っております。

今日は、東京から吉村有司先生にもお越しいただいております。都市の人の動き、データをベースに実際にどのようにまちづくりをしていけばいいか、バルセロナの研究でも有名な先生ですが、ぜひ大阪の参考になるアイデアを頂ければと願っております。

その後、パネルディスカッション、それから、今回いろいろなデータを取っていただいたスペースシンタックス・ジャパンさん、ｕｎｅｒｒｙさん、三井住友カードさん、ＫＤＤＩさんから、大阪公立大学もデータをいろいろと取らせていただいたので、そういうものの発表も第２部でさせていただきたいと思っております。

長丁場になりますけれども、ぜひ皆さんとも意見交換しながら進めてまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

絹原： 嘉名先生、ありがとうございました。

今回のシンポジウムは、地元協議会と御堂筋協議会が主催し、大阪公立大学、大阪市建設局、（一社）ミナミ御堂筋の会が共催、（一社）大阪活性化事業実行委員会さま、戎橋筋商店街振興組合さま、大阪観光局さま、公益社団法人 2025 年日本国際博覧会協会さまによるご協力、ご後援をいただきました。また、大阪商工会議所さまにもご協力をいただきました。ありがとうございます。

また、戎橋筋商店街振興組合さまや今回プレゼンテーションいただく企業さまへのご協賛、並びに会場につきましては南海電気鉄道株式会社さまにご支援いただきました。重ねてお礼申し上げます。ありがとうございました。

第一部　シンポジウム

■ 基調講演

「データを駆使した歩行者空間化の実証と経済活性化」

東京大学先端科学技術研究センター　吉村 有司 先生

絹原 今日は「データを駆使した歩行者空間化の実証と経済活性化」と題しまして、東京大学先端科学技術研究センター特任准教授の吉村有司先生にお話しいただきます。

プロフィールを紹介させていただきます。吉村先生はポンペウ・ファブラ大学の博士課

程を修了。バルセロナ都市生態学庁、マサチューセッツ工科大学研究員などを経て、二〇一九年に現職に移られ、現在でもバルセロナ市役所情報局のアドバイザーを務められています。

データを用いた歩行者回遊分析手法の開発など、ビッグデータやＡＩなどを用いた建築・まちづくりに従事されておられます。

それでは、よろしくお願いいたします。

東京大学先端科学技術研究センター　吉村 有司 先生

皆さん、こんにちは。東京大学の吉村有司です。今日はお招きいただきまして、ありがとうございます。

私からは、まず「データを駆使した歩行者空間化の実証と経済活性化」というテーマで話をさせていただき、その後、皆さんと楽しくディスカッションできればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

最初に、私のバックグラウンドから紹介させていただきますと、私は日本人の建築家ですが、Ph.Dをコンピュータ・サイエンスで取っておりますので、専門分野としてはＡＩやビッグデータをいかに建築や都市計画、まちづくりに活用していくか、応用していくかというところを研究しています。

先ほどご紹介いただきましたように、二〇〇一年からはバルセロナ（スペイン）に移住しておりまして、この間、バルセロナ都市生態学庁やカタルーニャ先進交通センターなど、主に公的機関を渡り歩いてきました。

二〇一七年からは東海岸の方に移住して、研究員をしていたのですが、三年前に二〇年ぶりに東京に帰ってくることができたというのが、大まかなバックグラウンドです。

◆　二〇年間の取り組み

この二〇年の間に何をしてきたかと言いますと、一言で言うと、私は人や車、ものの動きなどを捉えて、都市の分析をすることを専門としてきました。しかし、言葉で説明してもなかなかわからないと思いますので、本日は三つほどのショートビデオを用意していますので、まずはそちらをご覧いただければと思います。

①　Trash Track

一つ目のショートビデオはモノの動きをビッグデータで解析した事例で、ゴミの動きを解析したものを見ていただきたいと思います。

皆さん、家庭からゴミを出されると思いますが、そのゴミが都市の中をどう回って、どのように移動して、最終的にどこに行くのかというのはなかなかわからないと思います。

Trash Trackというプロジェクトで、具体的には、シアトルで５００人くらいのボランティアの人たちに集まってもらい、彼らの家から出るゴミにセンサーを付けてもらって、それを追跡しました。

最終的に３０００くらいのゴミが集まり、それを基に解析結果を出しました。それによると、ゴミというのは、家から出て２週間くらいは家の周りをグルグル回っているのですが、１ヶ月くらい経つと東海岸の方に飛んで行きます。さらに言うと、一度目的地に着地したら、そこからは１年経とうが、２年経とうが動かないことがわかりました。このようなゴミの生態は今までなかなかわかっていなかったと思います。

これが一つ目の、モノの動きをビッグデータで解析した事例です。

② Under World

二つ目は「Under World」というビデオを見ていただきます。

スマートシティなどの話をするとき、多くの場合は地上を歩く人や通る車の話をしがちですが、考えてみると足元には電気や下水などの社会インフラが通っていて、そういう社会インフラがきちんと通っていることで私たちの生活は成り立っているわけです。そのように、実は足元にはまだまだ私たちが知らないお宝のビッグデータがザクザクと眠っているのではないかというのが、この「Under World」という映像です。

していることはそれほど難しいことではなくて、マンホールの蓋を開け、そこにセンサーを入れて汚水をサンプリングします。つまり、排泄された尿や便をサンプリングして、サイエンスという枠組みの中できちんと分析するということです。そうすると、その地域でどのような病気が流行りそうか、どういうウィルスがいるか、バクテリアがいるかというのをサイエンスとして捉えることができるので、これをまちづくりに活かせるのではないかと考えて、私たちは取り組み始めました。

ちなみに、今、私たちはコロナ禍の只中にいるので、ウィルスなどに対してかなり敏感になっていますが、私たちがこの取り組みを始めたのは二〇一四年ですので、先見の明があったのではないかと思っています。

③ Traffic Simulation

三つ目は、マイクロ・スコピック・トラフィック・シミュレーションです。バルセロナ時代の私の上司だったJaume Barceló博士という、世界的に有名な交通工学の権威が作ったもので、世界で初めて商業化に成功したと言われています。車一台一台の動きを非常に正確にシミュレーションしてくれるソフトです。

今日はバルセロナ全域のうちの一般街区を切り取って持ってきたのですが、この状態ですでに交通量が九二%の正確さできちんとシミュレーションできています。

ただ、私は建築家ですので、この裏にあるアルゴリズムの改善などにはあまり興味はありません。そうではなくて、私の場合は、このようなツールを使っていかに市民生活の質を上げていくのか、いかにまちづくりや都市計画に活用していくのかということに興味があります。

それで、私の場合は、次のように使っています。つまり、「明日から真ん中のエリアを歩行者空間にする」とした場合、このツールによって、今までそこを通っていた車はどこに行くのか、どこに渋滞が起こりそうか、どこに汚い空気が溜まりそうかということがコンピュータ上でわかるようになります。これはビッグデータやＡＩを用いたまちづくりのパワーだと思っています。

そういうことから、この二〇年間は、新しいテクノロジーがアーバンプランニングとアーバンデザイン、アーキテクチャーなどにどうインパクトを与えるのかというところにフォーカスしながら研究を進めてきたわけですが、今日は新しいテクノロジー（ＡＩやビッグデータなど）と歩行者空間化の関係性、さらには歩行者空間化と経済効果の検証、あるいはデータを用いた合意形成の可能性まで踏

み込めればいいと思っています。

今日の構成としては、まずは私がずっと取り組んできたバルセロナの歩行者空間化の話を少し紹介させていただき、その後に歩行者空間化の手法論として科学的なアプローチを紹介して、最後にウェルビーイングの話ができればと思っています。

◆　バルセロナのスーパーブロック

では、バルセロナのスーパーブロック（歩行者空間化）について紹介したいと思います。

――　我々の社会が向かっている都市像

まず、私たちが向かっている都市像についてですが、個人的には、どう考えても今後は歩行者中心のまちづくり、公共空間を大切にしたまちづくり、さらに言うならば歩いて楽しいまちづくりの方に、私たちの社会は向かっていくのではないかと思われます。

そういう観点で言うと、世界のトップを走っているのは、ニューヨークとバルセロナだと私は思っています。

ニューヨークには、ハイラインというプロジェクトが走っています。これは有名なプロジェクトなので、皆さんもどこかのメディアで目にしたことがあるかもしれませんが、元々市内に貨物列車のための高架鉄道が走っていて、それを撤去するとなったときに市民の間から「撤去するのではなく、空中庭園に変えてほしい」という要望が出たのが始まりです。それに対して、「それなら」ということで、ＮＰＯと自治体が一緒になって手を取り合いながら空中庭園に変えたという、本当に素晴らしいプロジェクトです。

ハイライン（ニューヨーク）

私もボストンにいるとき、ニューヨークは近いので、週末に飛行機で行って遊んで、ユニクロで服を買ってラーメンを食べて帰ってくるという楽しい生活を送っていましたが、ここに行くと“ザ・ウォーカブル”と言えるような非常に良い空間が広がっています。皆さんも機会があって訪れられると、とても良い体験になるのではないかと思います。

そうは言っても、私はニューヨーク市役所で働いていたわけではないので、ニューヨーク市役所がどういう戦略を立てて、どういう方向に向かっていったのかはわかりません。ただ、外から見る感じでは、「アートとの融合を目指しているのではないか」と思えました。いわゆる美しいまちづくりというものをアートや緑と一緒に行っているのではないかという印象を受けました。

逆に、バルセロナがやりたいことは明白です。バルセロナ市役所はデータを用いたまちづくりをしたいという意図がはっきりと出て

いる、活気ある自治体だと認識していますが、それが結晶化したのがスーパーブロックプロジェクトです。これは動画がありますので、見ていただきたいと思います。（動画の紹介）

バルセロナが取り組んでいるスーパーブロックプロジェクトは、九つのブロックを集めて、その内側を歩行者空間にするというのが基本的な考え方です。したがって、通過交通は外側を走ってもらうのが基本的な考え方ですが、ただ９つのブロックを集めて内側を歩行者空間にするだけなら、これほど世界的に騒がれることはなかったと思います。

では、なぜ今、このスーパーブロックがこんなにも世界的に熱い注目を集めているのでしょうか。理由の一つにはスケール感があると思われます。まず、バルセロナという自治体がどれくらいのスケールでウォーカブルを考えているかという、その本気を見ていただきたいと思います。

【図 1】バルセロナの現在の道路網

【図 2】バルセロナのスーパーブロック

バルセロナの現状を見ますと（図1）、赤い線で示したところが、普通に車が走れるところですが、これが数年後にスーパーブロックになると次のようになります（図2）。白く変わったところはすべて歩行者空間であり、市内全街路のうち六〇％以上を歩行者空間化するというのが、バルセロナが考えているウォーカブル政策です。

このスーパーブロックを実行した場合の利点としては、三つが挙げられます。

一つ目は、パブリックスペースが劇的に増えます。before / after で比較すると、数年後は表面積が約 270％増になると考えられます。

二つ目は、空気汚染が改善されます。バルセロナは空気が悪い市として認識されており、そういう先入観に包まれています。しかし、空気が非常に悪いエリアも、歩行者空間化するとEU の基準値以上に空気がきれいになります。

三つ目は、騒音のレベルが下がります。バルセロナは非常に喧しい都市として認識されていますが、それが数年後は静かな都市になると考えられています。

このように、市内全街路のうちの六〇％以上をすべて歩行者空間化し、その結果として、パブリックスペースが増え、きれいな空気が返ってきて、静かな都市になるという、これがバルセロナが進めているスーパーブロックプロジェクトです。

――スーパーブロックプロジェクトを始める為のパイロットプロジェクト

ただ、このような大変なプロジェクトは劇的な変化をもたらしますので、いくら“お気楽な”バルセロナ市役所といえども、こういう過激なプロジェクトをおいそれとやれるわけではありません。そこで戦略的に、段階的なパイロットプロジェクトを二〇年、三〇年かけて行っています。その最初のプロジェクトが、二〇〇五年に行われた「グラシア地区歩行者計画」です。

実は、このプロジェクトはバルセロナ都市生態学庁に入った初日に長官に呼ばれ、「明日からやりなさい」と言われて、右も左も分からないまま取り組んだ事案です。

グラシア地区は、車が発明される前の一七世紀に都市構造が作られたので、車という存在が全く考えられておらず、そのために車が大変に渋滞していました。まさに死んでいたエリアでしたので、これを歩行者空間化して見事に蘇らせました。今では市内で最も住みたいエリアのナンバー1、アーティストが最も住みたいエリアのナンバー1に輝いており、非常に有名な活性化したプロジェクトとして認識されています。

二〇一六年からは市内も歩行者空間化し、道路にペインティングしたり、子どもがサッカーゴールを置いてみたり、楽しく街路を使い尽くしているというのが今のバルセロナの状況です。

私が十一月に行ったときには、高齢者の方々が日向ぼっこをしていたり、小さな子どもが遊んでいたり、本当に良い雰囲気、空気感が作られていました。まだ交差点の一つだけですが、今バルセロナはこれを全域に広げようとしています。

スーパーブロックの一つのパブリックスペースの例を紹介しますと、元々四車線あった主要幹線道路を2車線潰して歩行者空間化しています。さらに注目していただきたいのは、

残っている二車線のうちの一つは公共交通機関優先レーンで、バスやタクシーしか走れない道路になっていて、普通の車は実質残りの一車線しか走れないようになっている点です。主要幹線道路をすべてこのようにしているので、いかにバルセロナが本気でウォーカブル、歩行者空間化を考えているかがわかるかと思います。

さらには歩行者だけではなく、自転車も大切にしたまちづくりをしています。自転車用のレーンは端に敷くのが普通の政策ですが、そうすると路駐車がいてそれを避けた場合、後ろから追突されてしまう危険性があります。そこで自転車レーンを真ん中に通してしまおうというのがバルセロナのユニークな解決方法だと見ていました。

◆ 歩行者空間化の手法論：科学的なアプローチ：データを用いた合意形成の可能性

ここから歩行者空間化の手法論に入ります。このような歩行者空間化をどのように科学的にアプローチしていくのか、さらにはデータを用いながらも合意をどう形成していくのか、その可能性について話したいと思います。

―― どうして「歩いて楽しい街を作るのか？」「歩行者空間にするのか？」

先ほどから述べているように、これから私たちの街はどう考えても「歩いて楽しい街づくり」という方向に向かっていると思いますし、今、世界中の都市、特に敏感な都市は歩行者空間化を制度的に行っていると思います。

ただ、その自治体の方、あるいは建築家やアーバンプランナーに「どうして歩いて楽しい街を作るのですか？」とか「どうして歩行者空間にするのですか？」という質問を投げかけても、あまり切れのよい答えは返ってこないと思います。たまに返ってくるとすれば「気持ちよさそうだからいいじゃないか」とか「私が歩行者空間を好きだからいいじゃないか」というようなフワッとした答えしか返ってこないと思います。

これについて一言でその理由を説明するのはいろいろな問題があって難しいのですが、ただ、私が思うに、建築家やプランナーというのは今までビッグデータを扱ってこなかったというのが大きな理由の一つとしてあるのではないかと思います。

ただ、これからの時代、都市には多様な考え方を持ったいろいろな人が住んでいますので、何かしら税金を使って都市を開発したのであれば、その効果がどうだったのかということをきちんとデータを用いて検証すべきだと思います。さらには、開発をしたときに、そこに住んでいる人々の生活の質が果たして上がったのか、もしくはそもそも幸せになったのかということをきちんとデータを取って分析する必要があります。それを、さらには次の計画にフィードバックをかけていくという流れが重要になると思いますし、もっと言えば、そのようなデータを用いて、そこに住んでいる人々とどう合意を形成していくのかということが、今後ますます重要になるのではないかと思います。

―― 歩行者空間化は小売店・飲食店の売上を上げるのか、下げるのか

そういう流れの中で行っているのが、次の論文の内容です。これは昨年出したもので、街路の歩行者空間化は、そこに立地している小売店・飲食店の売上を果たして上げるのか、

下げるのかという問題を、ビッグデータを用いて検証した研究となっています。

これはそれほど難しいことをしているわけではなく、むしろ非常にシンプルで、歩行者空間化される前と後でそこに立地している飲食店・小売店の売上を比較しただけです。しかし、先行研究と違うのは、私たちは一つの通り、あるいは一つのエリアで検証しただけではなく、ビッグデータを使って、スペインのすべての都市のすべての街路を対象に都市を比較し、統計的な有意性を出した点です。それが先行研究とは違うところです。

そのために、二つのデータを使いました。一つはクレジットカードの決済データです。もちろん個人情報法、つまりスペインの法律に準拠した形で留意したデータができました。

二つ目は、実はこちらの方が大事なのですが、オープンストリートマップから歩行者データの収集技術を確立しました。都市のデータを収集する機会には、いくつか問題があります。一つ目は、そもそもデータがデジタル化されていない可能性があるということです。例えば、バルセロナのような大都市はデジタル化されていますが、周辺のサバデルやテラサなどの小さな都市はデジタル化されていない場合が多い。つまり、自治体がデータを紙でしか持っていないということです。データを持っていたとしても、自治体間でフォーマットが違うことはよくあることで、データサイエンティスト泣かせです。例えば、渋谷区と新宿区でフォーマットが違うので自動化できないというようなことです。また、自治体によってはＰＤＦで配布していて、機械が判別できない形式で配布していることもあります。

だからこそ、私たち有識者は口を酸っぱくして、自治体の皆さんに、持っているデータを規格が統一されたオープンデータにすることの重要性、必要性を訴えかけています。

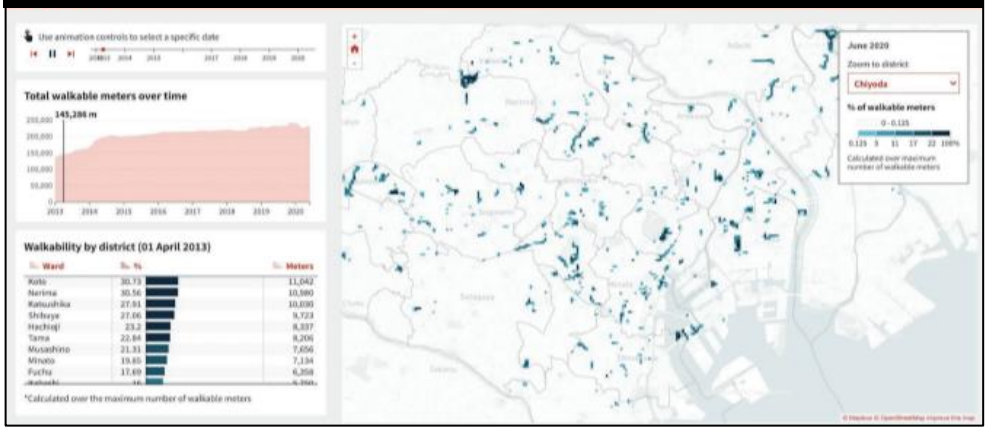
ただ、オープンデータ化するには時間がかかるので、それまでの間何もしなくてよいわけではありません。短期的な戦略として、自治体に頼らない建造環境データを取得できるよう、その可能性を求めて技術を開発するのも有識者の役目ではないか思い、このオープンストリートマップ（ＯＳＭ）の技術を開発したという流れがあります。

ＯＳＭはご存じの方も多いと思いますが、Wikipedia の地図版だと思っていただければといいと思います。つまりは市民の皆が寄って集って地図を作っていくようなものです。一つの特徴としては、一つひとつの道に対して、「長さは何メートルか」「幅は何メートルか」「用途は何か」「用途が変わったとしたらいつ変わったのか」などの属性情報が付いています。そういう情報を市民が一生懸命に作ってくれるのであれば、アカデミックの人間には、公益性の高い有益な情報をいかに作り出すかという役目があります。それを行ったのが、ＯＳＭからの情報抽出技術です。

ちなみにそのとき開発した技術を、東京全域から集めたのが以下になります（図3）。これを見ると、二〇一三年～二〇二〇年までの間に、東京のどの街路がいつのタイミングで歩行者空間化されたのかがわかります。これほど一つひとつの街路のミクロなデータを、東京というマクロな全域で集めたことは歴史上なかったと思います。このようなことを手作業でやっていたら何年もかかってしまうでしょう。大阪でも同じだと思います。しかし、ビッグデータやＡＩ、ＡＰＩなどを使うとそれが一瞬でできます。一瞬は言い過ぎでも、三日間くらいコンピュータを稼働させれば十分に実現可能です。こういうものが、今後、私たちの都市計画の社会的な基礎技術になっていくのではないかと思っています。

このようにビッグデータを使ったグリッド単位の歩行者空間化によって、スペイン中の街路について、いつ、どの街路が歩行者空間になったのかということが、すべてマッピングできるようになっています。さらに、そこにグリッド単位の小売店・飲食店の売上情報を重ねると、歩行者空間化によってそこに立地する小売店・飲食店の売上が上がるのか、下がるのかという問題に明確に答えることができます。

【図3】東京都全域における歩行者空間の分布と、時系列による用途変更のマッピング



時間の関係で結果だけお伝えしますが、結果としては、私たちの目論見通り、歩行者空間化すると、そこに立地する小売店・飲食店の売上は軒並み上昇するという良い結果が出ました。この結果は、今後ウォーカブルを推進したい自治体の皆さん、あるいは私企業の皆さん、その他団体の方へのサイエンス側からの最大減のバックアップだと思っています。これによって、歩行者空間化の経済性は示されたのではないかと思います。

――　歩行者空間化によって、そこに住んでいる人々は幸せになったのか？

ただもう一つ残っているのが、そもそも歩行者空間化したことによって、そこに住んでいる人たちは幸せになるか、どうなのかという問題で、これには全く答えられていません。これは非常に重要な問題だと認識していますので、また別に取り組まなければならないと思っています。

それに精力的に取り組んでいるのが、「個と場の共創的 Well-Being」というプロジェクトで、こちらは京都大学の心理学系の内田由紀

子先生と一緒に行っています。これまで心理学は個人にとっての幸せを追求してきたという歴史がありますが、そもそも私たちの社会は「私」個人だけではなく、いろいろな人がいるので、「私」だけが幸せになっても仕方がありません。そこで「私」だけではなく、友だちや家族など「私」の周りの人たちも皆で一緒に良い状態になるにはどういう場が必要なのかということをデータで明かしていこうと考えています。データを活用して、そういう場の共創的な Well-Being を考えていくというプロジェクトになっていて、私たちは今懸命に研究しているところです。

それにより、先ほどの「歩行者空間化によって、そこに住んでいる人々が幸せになっているかどうか問題」に対し、一つ明確な答えが出るのではないかと思っています。ここに答えが出ると、これまでの都市のつくり方、あるいは街のつくり方が根本的に変わる可能性があるのではないか、私たちはそのくらい風呂敷を広げてもいいのではないかと思っています。

◆　まとめとして

それでは、今日の発表のまとめをしたいと思います。

今日は、データを用いた「まちづくり」ということで、バルセロナの事例を最初に紹介いたしました。

続いて、ビッグデータ分析の「まちづくり」への可能性、あるいは直感ではないデータを用いて、どのように歩行者空間を考えていくのか、「まちづくり」を考えていくのか、その可能性についてお話ししました。これを後半部分のディスカッションにつなげていければいいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

絹原　吉村先生、ありがとうございました。私たちがずっと気にしていた歩行者空間化が果たしてどういう影響を与えるのかということについて、明快に示唆を頂いたと思います。ありがとうございます。吉村先生には、この後、ディスカッションでもお世話になりますので、よろしくお願いいたします。

■　これまでの経過と回遊性検討プロジェクトの報告

絹原　続きまして、「これまでの経過と回遊性検討プロジェクトの報告」に移りたいと思います。

まず、大阪市 建設局 企画部 道路空間再編担当 課長代理の松野雅晃さまより、なんば駅前広場などの道路空間再編事業の背景や経緯についてお話しいただきます。

「空間再編　大阪ミナミの取り組み」

大阪市 建設局企画部道路空間再編担当
課長代理 松野 雅晃 氏

大阪市建設局の松野です。私からは、御堂

筋となんば周辺のプロジェクトについて紹介したいと思います。

◆　御堂筋の道路空間再編

まず、御堂筋ですが、御堂筋は大阪のメインストリートで、幅員が約四四メートル、長さ四キロメートルの幹線道路です。銀杏並木が有名な通りです。

昨年十一月には「御堂筋イルミネーション」として一部区間を車から歩行者に開放しています。

――　御堂筋の変遷

御堂筋の変遷について紹介しますと、まず八十五年前に六メートルから四四メートルに拡幅されました。

そして五〇年前、大阪万博のときに南行きに一方通行化されました。

一方でその後、約四〇年前に比べて車の交通量が四～五割減り、逆に歩行者と自転車は増えているという状況になり、このような状況を踏まえて、五年前に御堂筋完成八〇周年記念事業を行いました。当時の吉村市長に推進委員会の委員長になっていただき、公民連携で今後の御堂筋のあり方について議論を行いました。そこでできたのが「御堂筋将来ビジョン」です。

御堂筋イルミネーション（令和４年11月３日）

――　御堂筋将来ビジョン

「御堂筋将来ビジョン」のコンセプトは、車から人中心の空間へ転換していくということで、交通等の影響も多いことから、段階的な空間再編に取り組んでいくこととしています。現状の御堂筋は本線四車線、側道二車線の道路ですので、まず、その側道部分を歩行者空間化していくことに取り組んでいます。

整備前は、休日になると六メートルほどの歩道が歩行者で埋め尽くされるという状況でした。それが整備後には、六メートルの歩道が十五メートルくらいになりますので、人がゆったりと歩けるようになりました。最近はコロナ禍も終息し、インバウンドの関係で人が増えており、この広がった歩道でも狭いくらいの人が来ているような状況です。

――　御堂筋側道歩行者空間化　～ファーストステップ

では、このような空間再編の取り組みをどのように進めてきたのか、それについて紹介しますと、まず交通等への影響も大きいので、一度閉めて、そこに歩行者と自転車のスペースを取りました。それから人が座れるベンチなどを設置し、そして社会実験を通じて課題を抽出して、しっかりと交通量や荷捌きの調査を行った上で、交通管理者の協議や地域の方々と議論させていただいて、整備に踏み切ったという状況です。

工事の進捗状況を紹介する図がありますが

（図4）、赤い横ラインが御堂筋で、オレンジ色がモデル整備を行った区間です。青色の道頓堀以南については、令和四年三月に東側、令和四年十一月に西側が完成しており、今は道頓堀川より北側の長堀通までを工事中です。二〇二五年に万博が開催されますが、このときまでにこの区間を完成させたいと考えています。今日はミナミの取り組みについてお話ししていますが、長堀通以南のこの界隈を大阪のミナミエリアと呼んでいます。

― 道路空間の利活用

それから、整備が完成して広がった空間に対して、民間が活動しやすい制度の整備を行っています。

一つ目は「道路協力団体制度」ですが、民間団体が道路協力団体になりますと、道路の清掃や利便増進・収益活動などの一～六号業務が可能になります。御堂筋については、道路協力団体の募集を行い、現在、三団体に道路協力団体になっていただいています。主な取り組みの事例として、（一社）御堂筋まちづくりネットワークさんに街園の再整備や維持管理（一号業務）を行っていただいています。

二つ目は「歩行者利便増進道路制度」で通称「ほこみち」と呼んでいる制度ですが、令和三年二月に御堂筋を全国で初めて、この「ほこみち」道路に指定しました。それにより、歩行者の利便性増進を図る区域を指定し、民間のイベントやベンチで滞留空間を作るなどの取り組みができるようになっています。

― 公民連携

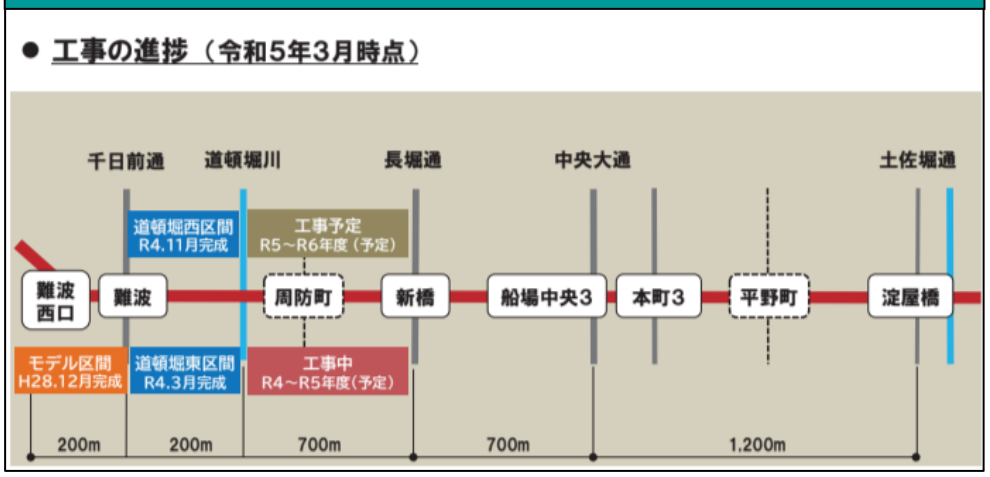
このような民間の制度については、公民連携という形で二つの協議会を設置しています。

一つは御堂筋協議会で、各団体の取り組みを全体で共有し、民間が活動しやすい仕組みや制度とは何かということについて、御堂筋全体で意見交換を行う協議会です。

もう一つは地元協議会で、ハード整備に関する地域それぞれ特有の事情について意見交換するというものです。これは沿道の町会長さんや商店街さんに入っていただいて議論しています。

このような公民連携は、社会実験を四回ほど繰り返しながら少しずつ取り組んできました。二〇一七年に、将来の魅力ある滞在空間の可視化ということからスタートして、どのような利活用を継続できるかということや、

【図4】御堂筋側道歩行者空間化　～ファーストステップ～



回遊性の検証、持続可能な仕組みなどを実験しています。これについては、この後、御堂筋の会員の方からご説明があると思います。

◆　なんば駅周辺の空間再編

続きまして、なんば駅周辺です。整備前の駅前はロータリーで車中心の空間になっていましたが、昨年十一月に駅前広場に入る車を通行止めにして、広場化の工事をしています。真ん中辺りには元々タクシープールがありましたが、この全体を広場化しています。

――　整備プラン

駅前広場の整備イメージパースを見ますと、外周部が歩行者の通行空間、中央部分が活用エリアとなっており、この秋の完成を目指して今工事を進めているような状況です。

また、昨日、このなんば駅前広場の道路を「ほこみち道路」に指定することができましたのでご報告いたします。

――　これまでの経過と社会実験

このプロジェクトの経過を紹介しますと、まず地元協議会の発案いうところが特徴的なプロジェクトであり、その後、平成二七年から行政も加わって検討を進めています。

過去二回（平成二八年十一月、令和三年十一月）社会実験を行い、タクシープールを将来イメージにあるような空間に変えた場合、現在車を利用されている人に問題がないかどうか懸念されるところがありましたので、実際に広場に入ってくる車を止めて、交通の影響や荷捌きの状況などをしっかりと検証しています。これが一つ目の社会実験です。

駅前広場 整備イメージ図

同じ時期にもう一つ、広場が完成した後、ここを利活用するように、エリマネ団体の方が主体となって、閉めたときに利活用をイメージできるような取り組みについても社会実験を行ってきました。

また、広場に接続する道路で「なんさん通り」という通りがありますが、駅前からのにぎわいの連続性が大事になりますので、併せて歩行環境の改善や無電柱化の取り組みを進めています。

以上が私からのプロジェクト紹介になりますが、御堂筋や駅前のプロジェクトについては、道や広場というのはあくまで街の一つのパーツであり、ここだけが良くなっても仕方がありませんので、吉村先生から教えていただいたように、どのようにして街の活性化につなげていくかということを、ここに集まられている地域の皆様方と一緒に議論しながら進めていきたいと思っております。引き続きよろしくお願いいたします。

絹原　松野さん、ありがとうございました。

「ミナミの回遊性向上プロジェクトについて」

一般社団法人ミナミ御堂筋の会
絹原　一寛

続いて私、ミナミ御堂筋の会の絹原から、今回のテーマでもあります回遊性の向上に向けたプロジェクトの経過について報告させていただきます。

――　プロジェクトの経緯

冒頭、吉村先生から、歩行者中心の「滞在」「回遊」が「売上」「購買」につながるというデータをいろいろな形で示していただきました。商業の都ミナミも、これに注目してまちづくりを進めていこうということでプロジェクトがスタートしました。

実は、二〇一九年からこういう検討を始めていて、データ会社の皆さんにどういうデータが取れるかをプレゼンしていただいたり、社会実験のデータを皆さんで共有して、どういう手が打てるかという議論を進めてきました。

今年度は「滞在空間づくり」と「分散型イベント」によって回遊の促進を実施しました。「御堂筋チャレンジ」という形で一ヶ月間の社会実験を行い、ベンチを設置したり、東西でオープンカフェをしたりして歩行者空間づくりをしています。それから「道頓堀リバーフェスティバル」という催しを地元の方々が開催され、十一月十二、十三日の二日間、ミナミ全体を回遊していただく分散型のイベントを実施しました。

ここで携帯電話の人流データやスマホアプリの人流データ、それから大学や専門会社の皆さんによる空間の調査、解析など、こうしたデータを官民連携の座組みで取得して、回遊にどういう影響を与えているかという議論を行っています。

――　御堂筋チャレンジによる回遊状況

結果を紹介したいと思います。まず、御堂筋チャレンジ一ヶ月間の回遊状況です。

結論から述べますと、滞在時間や来訪者が増え、回遊の移動範囲も増えています。沿道の戎橋筋商店街の皆さまにご協力いただいたアンケートの結果によると、来店者や売上の増加というインパクトにつながったという結果が出ています。

データの一部を紹介しますと、携帯電話のデータを基に来訪者の増加や、東西の通りにも来訪者や滞在時間が増えていることがわかります。それから、エリア全体の総滞在時間も増えているというデータもあります。また、どこからどこへ行ったかという分析もできますので、以前から分断の要素になっていた千日前通りのような太い幹線道路も越えて人の動きが流れていくというデータや、さらに東の方にも広がっているというデータも、昨年度と比較したデータとして出ています。それによって売上が増えたという回答も頂いたという結果でした。（図5）

― 道頓堀リバーフェスティバルによる回遊状況

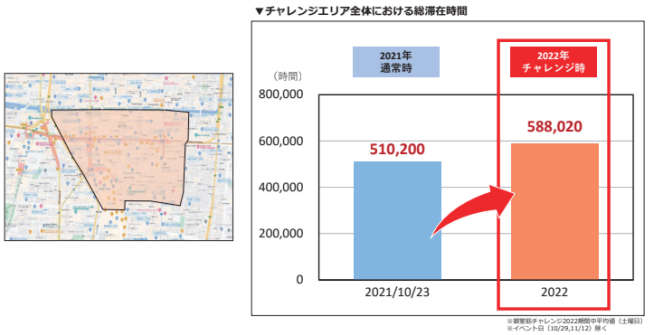
「道頓堀リバーフェスティバル」に関しては二日間のデータですが、こちらも同様に会場の来訪者やエリアの滞在時間、それから、二日間の売上や来訪者が増えたというインパクトがありました。

個々のデータは省略しますが、それぞれの場所で人が増え、時間も増えていること、それから会場以外のエリアでも滞在の状態が濃くなっているというデータも出ています。

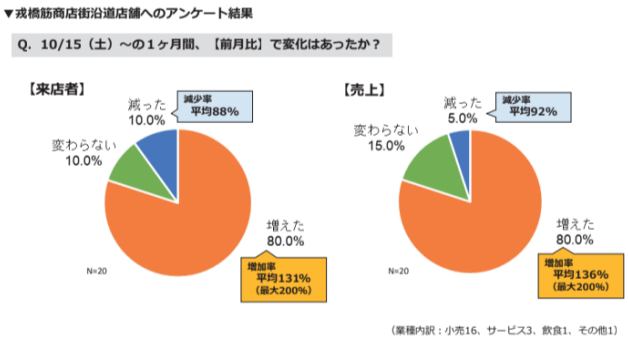
今回、中央区の方でデジタルスタンプラリーという回遊型のイベントを開催され、それによってさらに回遊が促されたという面もありますし、売上も増えています。（図6）

このように私たちはデータを使って、万博に向けて「歩いて楽しいミナミ」をつくっていくことを目標に、「①おもてなし、回遊のゲートづくり」「②一息つける やすめる場所づくり」「③行きたい、歩いて楽しい商店街づくり」「④歩きやすい、動きやすい街づくり」というイメージで将来像の議論を始めているところです。

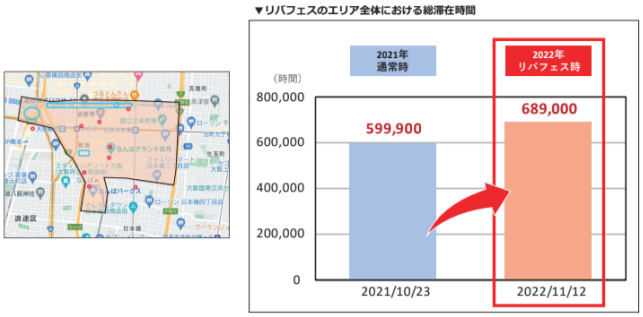
【図5】チャレンジを実施したエリア全体で総滞在時間が増加



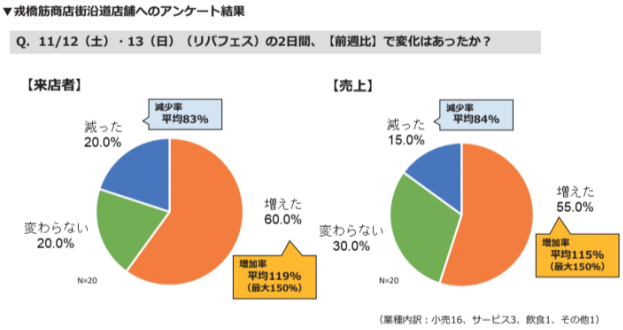
【図5】社会実験期間中に1ヶ月に来店者・売上が増加



【図6】イベントを実施したエリア全体で総滞在時間が増加



【図6】リバフェス期間中に1ヶ月に来店者・売上が増加



■ パネルディスカッション

「データ活用と回遊で切り開く ミナミの未来」

【学識者】　嘉名 光市 先生（大阪公立大学・御堂筋協議会座長）※コーディネーター
吉村 有司 先生（東京大学先端科学技術研究センター）

【地域・商店街】　千田 忠司 氏（大阪活性化事業実行委員会）
菊地 正吾 氏（戎橋筋商店街振興組合）

【エリマネ関係者】中塚 一（ミナミ御堂筋の会）

絹原　それでは、パネルディスカッションに移りたいと思います。「データ活用と回遊で切り開く ミナミの未来」と題しまして、来るべき「2025 大阪・関西万博」を目指し、こうしたデータ活用や回遊を切り口に、ミナミでどのように展開していくべきか、専門家や地域の皆様によるディスカッションをしていただきます。

登壇者をご紹介しますので、順次、前の方にご着席願います。

一般社団法人大阪活性化事業実行委員会代表理事で大阪市商店街総連盟 理事長、千日前道具屋筋商店街 理事長も務められています千田忠司さまです。

戎橋筋商店街振興組合 理事長で、なんば駅前広場の地元協議会、なんば安全安心にぎわいのまちづくり協議会の会長も務めておられます、菊地正吾さまです。

御堂筋沿道の地権者の会、一般社団法人ミナミ御堂筋の会で事務局、エリアマネージャーを務めます中塚一です。

そして、先ほど基調講演をいただきました東京大学 吉村有司先生です。

コーディネーターは、大阪公立大学教授で御堂筋協議会の座長をお務めいただいています嘉名光市先生です。それでは、以後の進行につきましては嘉名先生にお願いいたします。

◆ 趣旨説明

嘉名　それでは、パネルディスカッションを始めたいと思います。「データ活用と回遊で切り開く ミナミの未来」と題して、意見交換を進めてまいりますが、先ほど吉村先生から、基調講演という形でバルセロナの取り組みやデータサイエンスの重要性、それから可能性、面白さ、それを基にまちづくりをしていくことの展望をお話しいたたぎました。

また、大阪市の方と絹原さんから、今の大阪ミナミでの取り組みについて紹介していただきましたが、地域の皆さんもさまざまな活動をされていますので、まずはパネラーの千田さん、菊地さん、中塚さんから順番に自己

紹介を兼ねて、それぞれの取り組みの状況をご紹介いただきたいと思います。

それでは、千田さんからお願いします。

◆　話題提供

――　千日前道具屋筋商店街の取り組み

千田　皆さん、こんにちは。私は大阪府下一円の商店街の理事長を務めている関係上、商店街の活性化と2025年の大阪・関西万博を成功させよう、盛り上げようということで、グローバル化、デジタル化、キャッシュレス化が絶対に必要であると考え、これを推し進めているところです。

それから、ミナミ、千日前道具屋筋で理事長を三〇年ほど勤めさせていただいていますが、現在はコロナ禍でどうしたらいいかという問題があり、単組の商店街だけではもうやっていけないということでお声掛けをしたのが二〇〇〇年からです。

その時に気が付いたのは、やはり、まちは安心安全、クリーンであるということ、それから今あるものを活かすということですね。このミナミ、中央区には、食・人・商い・文化、ものづくりなどすべてに優れたものがありますので、こういったものを「まちの人は知ってるのかな」というところからこれに取り組んできたわけです。

そういうことをしているうちに、二〇〇五年には国内からいろいろな人が来られました。その中では、まち案内をしたり、自分たちのものづくりを一緒に体験していただいたり、またはお店で商い体験、販売体験など、いろいろなことをさせていただいて今日があるのではないかと思っています。

そういう中で危機感を覚えたのが、先ほどから言われているデータなんですね。それで一〇年くらい前から商店街の入り口にカメラを付けて、人がどのくらい増えたのか、それを組合員の皆さんに提供しています。やはりデータは必要であり、「感覚だけでは人は付いてこないんやな」と思いました。

また、スマホ時代に入った中で、まちの魅力をしっかりと知っていただこうと考えて「音声ガイド」を作りました。また、ＡＲを入れて「今」と「昔」という形でまちを紹介するものも準備しています。さらに、大阪に来ていただいたらデジタルスタンプラリーでいろいろなまちを散策できるように、一キロコース、二キロコースなどのコースを十五ヶ所くらい作っています。買物をして、人と接して、楽しんでいただく、そういうまちを目指していこうと思っています。

現在はＶＲで立体商店街を作って、ホテルでも臨場感を持って見ていただけるなど、ＸＲとＶＲを組み合わせて、数年先を行くようなまちづくりをしています。

このように、一般社団法人大阪活性化事業実行委員会で商店街や企業の方、地元、ホテルや鉄道や商工会議所、観光局などオール大阪でいろいろと取り組んでいる最中です。

例えば、万博を盛り上げていこうと、千日前道具屋筋にちなんで「一〇〇〇前日」からカウントダウンをしている事業があります。ちょうど八〇〇日前が二月三日の節分の日でしたが、今の道具屋筋は外国客が七～八割いますので、この日に「巻き寿司体験」を行い、豆を配って楽しんでいただきました。次は五月十四日に「コナモン会」という形で、イカ焼きとたこ焼きを外国客に無償で体験してい

万博千日前

ただき、楽しんでいただく予定です。これには区役所から応援をいただいて缶バッチ体験を行うとか、大阪青年会にも入っていただくなど、いろいろと楽しんでいただくというテーマでまち興しに取り組んでいます。

嘉名　千田さん、どうもありがとうございました。「一〇〇〇日前」のカウントダウンは昨年の七月十八日でしたね。千日前だから「一〇〇〇日前」からというのは凄いと思いましたし、道頓堀リバーフェスティバルでもスタンプラリーなどいろいろなツールを駆使していただいて、ミナミ全体を巡っていただくような仕掛けをしていただきました。

これをデータで取ると、今までよりもかなり人の歩行距離が延びていることがわかったということです。ありがとうございます。

では続きまして、菊地さんに話題提供をお願いします。

――戎橋筋商店街の取り組みについて

菊地　よろしくお願いいたします。私は戎橋筋商店街振興組合で理事長を務めておりますが、なんば駅前広場の公共空間の再編事業の地元協議会「なんば安全安心にぎわいのまちづくり協議会」の会長も務めさせていただいております。

まず、エリアのイメージをつかんでいただくために、簡単に説明させていただきますと、地図の赤い点線で囲んだエリアで、中心の南北に走る商店街が戎橋筋商店街です（図7）。北側にある道頓堀川は全国的に有名なグリコの看板があるなど、観光でたくさんの方が来られている場所です。そこから私たちの商店街を三七〇メートルほど南に下っていただきますと、高島屋さん、なんばマルイさんが囲むなんば駅前広場があり、今秋の完成に向けて事業が進んでいるエリアになります。そして、その西に御堂筋があります。つまり、南北が約370m、東西が御堂筋を入れて約200mのエリアとイメージしていただければと思います。

なんば駅前広場を中心に説明しますと、この広場は今秋に一定完成しますが、ここで社会実験を二度行い、昨年の秋には千田会長主催で「道頓堀リバーフェスティバル」という大規模なイベントも開催しました。

道頓堀という大きな観光の名所と、秋に向けてなんば駅前広場が完成し、そして御堂筋

【図7】御堂筋隣接エリア

も公共空間ということで、秋以降、このエリアは公共空間の再編エリア的な場所として大きく変わっていくと思います。この中で、ミナミに来ていただいたお客様に、いかに長い時間このミナミのまちを楽しんでいただいて、まちを回遊していただくかという課題解決も併せて、今、地元の方と行政と官民一体で協力して事業を進めているところです。

まちが変わっていくと、良い部分もある一方で、やはり環境課題についても向き合っていかなければなりません。全国各地の皆さんもまちの課題がそれぞれあると思いますが、ミナミで今大きく挙げられるのは、違法駐輪や喫煙などの問題で、こういう部分を街の再編事業とともに改善していかなければならないと思っています。

また、なんば駅前広場や御堂筋、私たちの商店街だけが良くなっても、一部良くなったところの問題点が、例えば隣接するエリア側に右から左へ移っただけという状況になっては空間再編事業の意味がありません。やはりその効果をミナミ全体のエリアにどうつなげていくかというところが課題になります。

そういうところで、回遊性に関しては、社会実験として「道頓堀リバーフェスティバル」を秋に開催したときも、なんば駅前広場だけではなく、ミナミ各所で同日にイベントを開催しました。そのようにイベントを楽しんでいただける場所が何ヶ所かあると、必然的にお客様はそこを回っていただけますし、同時にミナミにいる時間が長くなります。商店街の各店舗の意見を聞きますと、同日の売上について具体的な数字まではお聞きできませんが、相対的な感覚でもお客さんが増えたのではないかというデータが出ています。

そして、拠点ごとの魅力ある部分、回遊性、活性化という部分と、加えて環境改善の部分も基盤にないと、どれだけソフトの部分を活性化しても汚いまち、安全でないまちでやったのでは効果が薄れてしまいます。この両輪で今行政と一緒に進めているところです。

先ほども述べたように、当商店街のエリアが良くなるだけではいけないということで、御堂筋と私たちの商店街が東西をしっかりとつなぐことも大事だと考えています。今まではどうしてもエリアごと個々で動いていたり、各商店街だけで動いたりすることが多くて、なかなか連携が取れませんでした。けれども、こういう公共空間の再編というのは、このコロナ禍で厳しい状況だったこともありますが、各エリアの皆さんが協力し合ってエリア全体で活性していかなければならないと思います。点で頑張っているところがいくつあってもそれがつながらなければどうしても効果が薄れてしまいます。皆がつながって、街が良くなれば、必然的にそれぞれの通りや、もちろんそこに面する店舗の売上にもつながっていくと認識しています。そのように、御堂筋と駅前広場の公共空間の再編事業を機に。皆さんの意識が高まっているのではないかという気がします。

ただ、一方で先生の話にありましたように、一度に全体を変えていくのはなかなか難しいので、御堂筋～戎橋筋商店街～法善寺横丁につながる通りの商店街さまに協力をいただいて、この春から秋にかけて社会実験を行って、データをしっかりと行政の方に明示させていただきながら、またそういうデータを基に検証実験を重ねて、一つずつ課題を解決して、

【図 8】環境改善・回遊性向上に向けて官民連携モデルとして取り組むこと

説明させていただいたエリアの活性化につないでいければと考えています。（図８）

そういう役割で、私たち商店街としては協議会の立場から活動させていただいています。

嘉名　ありがとうございました。菊地さんから戎橋筋商店街の取り組みについて説明していただきましたが、特徴的なのは、戎橋筋商店街だけではなく、周りを面として捉えて、地域の環境の改善や現状がどうなっているのかというデータを取られていること、また御堂筋の空間再編、それから戎橋筋商店街、それをつなぐ東西の道づくりをすることが面的なまちの活性化につながるのではないかということで、実際にプロジェクトを立ち上げておられるというお話を頂きました。ありがとうございます。

続きまして、中塚さんから話題提供をお願いします。

――　御堂筋の会の取り組みについて

中塚　ミナミ御堂筋の会のエリアマネージャーの中塚です。よろしくお願いします。

私たちは「御堂筋だけが良くなってもミナミは良くならない」と合言葉のように言っていますが、なぜこういう回遊性に取り組んでいるのかということについてご説明したいと思います。

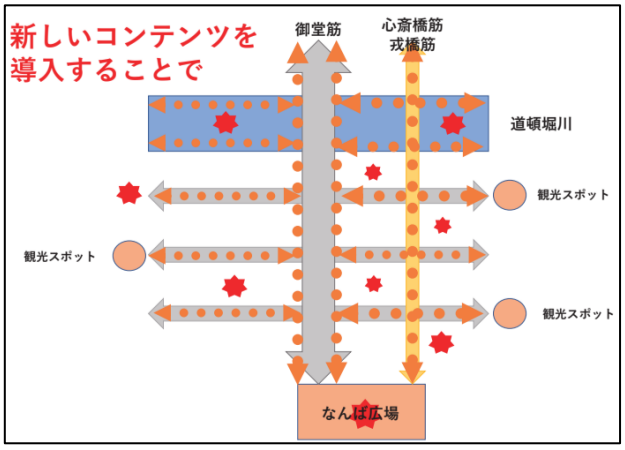
まず、海外の様子を旅行者の気分で見ていただきたいのですが、例えば、パリのシャンゼリゼ通りのメインストリートを歩いて、次にニューヨークのタイムズスクエアのように人が集まって賑わっている広場に行きます。その後、よこみちや路地にある店でお茶をして、最後は地方の地元の方が楽しそうにしているところに行って、市民の気分になって美味しいものを味わいます。そして、オッサンは怪しい夜の街に消えていくという、これが私たちが海外に行ったときの楽しみ方です。ミナミも多分、時間帯によって旅行者はこのような街の使い方をしているのではないかと思います。

よく考えると、例えば、ゴッホの『夜のカフェテラス』という有名な絵がありますが、イタリアのベニスにもそれとよく似た風景があるので、今も昔もやはり夜のよこみちや路

地には魅力的な店があって、ここで食べたとか、誰と食べたとか、そういう思い出が街の魅力度や価値を決めているような気がします。

私たちは御堂筋のメインストリートの事業に取り組んで、官民一緒に道路の拡幅を行っていますが、実は坪単価が月坪三〇万円という凄い値段になっています。そうするとジェントリフィケーションでドラッグストアなどしか出店しないような状況になってしまいます。それでは「世界の御堂筋」という意味がないのではないかと思われるので、皆さんとともに街全体で回遊や街の魅力を作っていくべきだと思っています。

先ほど一日の人の動きを紹介しましたが、これから私たちは時間ごとの人の動きを見ていかなければならないと思います。現状では、昼から夕方は心斎橋筋や戎橋筋が人通りのメインで、次いで御堂筋の人通りが多いようですが、夜になると、横の通りにも流れていくような形になっていると思われます。



【図 9】新しいコンテンツの導入で回遊性の向上

そこで、新しいコンテンツを導入することによって、もっと一日のうちの十八時間くらいは人々が回遊するような街にしていきたいと考えています。データを取りながら、地域の皆さんと一緒にコンテンツを作りながら取り組んでいきたいと思っているところです。ありがとうございます。（図9）

嘉名　ありがとうございました。いろいろと楽しいまちに行ったことがあるだろう的な話でしたが（笑）。

中塚　これらは実は嘉名先生が教えてくださった都市で、「そこ行きや」「ここ行きや」といつもプレッシャーをかけられていたところです（笑）。

嘉名　そういう返しがくるとは思っていませんでした（笑）。大変楽しいまちばかりです。ただ台北は私の勧めたものではないです（笑）。

では、ここまで大阪の取り組みを一通り紹

介させていただいたところで、吉村先生からどのような感想を持たれたか、ご意見を頂きたいと思います。

吉村　皆さん、ご紹介をありがとうございました。感想としては、とても楽しい商店街という、そういう思いが伝わってくるようなプレゼンテーションだったと思いますし、今後ここをウォーカブルにしていくことに対する熱意やポテンシャルを凄く感じました。

その中で、皆さんはとても仲が宜しくて和気あいあいとされていて、そういう意味では凄くいいなと思ったんですよね。

先ほど言われたのですが、この地区だけ、あるいはこのストリートだけが良くなっても、まちは良くならないわけで、それは問題を別のところに投げているだけなので、やはりエリアとして良くなっていく、さらにはそこに住んでいる人たちといかにそのエリアを育てていくかという、その観点がとても大事だということが一点目です。

二点目は、今日は一つのテーマがデータということなので、データに関して少しだけ意見を言わせていただきますが、やはりデータは大事なんですよね。今から取ることが大事だと思います。いわゆる都市計画のまちづくりって、こう言っては何ですが、やって終わりというのが多かったんですよ。だけどやはり、これからはちゃんとデータを取って、例えば御堂筋をウォーカブルに変えたとしたら、その効果はどうだったのかということをきちんと検証しなければいけない。検証するためには、今のデータがないとダメなんですよ。やってからでは遅いんですよね。なので、私のアドバイスとしては、なるべく早くデータを取り始めることが重要かと思います。

それで三つ目なんですけれども、ぜひ若い人たちも巻き込みながら、若い人たちがワクワクするような街づくりや商店街の企画とかを作っていただけるといいんじゃないかと思いますね。ここに集まられた方々は年齢層の高い方々ですが、逆に若い人たちがワクワクするというか、「ここは楽しいんじゃないか」という風に思ってくれないことには未来はないと断言できると思います。なので、皆さんにとってはもちろんですが、そういう人たちにとってもいい街づくり、いい都市、商店街というものを考えていただけると、より一層良い取り組みになるのではないかと思います。

嘉名　吉村先生、ありがとうございました。第2部はもう少し若返るので楽しみにしていただいたらと思います（笑）。

◆　データ活用に関する課題と意見交換
――　オープンデータの重要性について

嘉名　データに関してですが、二〇二〇年頃から毎年いろいろなデータを取ってきて、それについて皆さんで議論してきた中で少しずつわかってきたことがあります。

まず、かなり乱暴にざっくりと言いますが、データを取るまで、私たちは、ミナミはもっと人が回遊していると思っていたんです。ぶらぶらしながら長い時間歩いている街だと思っていたんですね。私の子どもの頃のイメージもそういう感じでした。ところが、データを取ってみると、実は全然人が歩いていないんです。歩く距離が凄く短い。二〇〇メートル歩いているかどうかくらいなので驚きまし

た。目的地に行って帰ってくるみたいな、そういう動き方しかしていないということがわかりました。

また、先ほど東西道路で千日前通りなどの話がありましたが、やはり太い幹線道路は通行の障害になっていて、そこから人の足が延びないこともわかってきました。そこで、もっとミナミの歩行距離を延ばしたい＝滞在時間を延ばしていきたいと考えています。

それから、どうしても道頓堀と戎橋筋に人が集中し過ぎていて、これは道頓堀や戎橋筋にとっても良くないところがあると思います。昨日、今日ミナミに行ったら完全に人が戻っていて、人が多すぎるという状態になっていました。

それで中塚さんも言われましたが、いわゆるジェントリフィケーションみたいなことが起きてドラッグストアばかりの街になると、それは街として面白くないですね。やはり多様性が魅力だということで、何となく見えてきたことをデータで取り出してわかってきたことがあって、それで今、回遊するゲートづくりとか、なんば駅前広場とか、街を歩いたときにポイントになるような場所を作ろうとか、そういう取り組みをしているわけです。実は、ミナミには休める場所があまりないんですよ。歩行距離が延びないのは、休める場所がないことも関係するかもしれないので、休める場所を作っていこうということです。

それから、そもそも地下とか地上とか段差とか、歩きにくい部分もかなりありますので、そういうことも一つひとつチェックしていこうということです。

また、ミナミの街の賑わいは道空間だけではなくて、やはり沿道のお店があってこそですから、そこのにぎわいづくりがかなり大事になります。

この四つくらいの観点で、街づくりの将来像を描こうということを始めたところです。

そういう意味では、データがかなり重要だということはわかってきましたし、商店街の方も通行量のデータなども頂いていますし、私たちも大学でデータを取ったり、大阪市さんが交通流を見るカメラでＡＩ化して通行量をカウントしたり、いろいろなデータがありますが、それがいろいろなところに散らばっているわけです。つまり、皆が街のことをリアルにわかるようなプラットフォームになっていないということが問題なんです。例えば、携帯電話会社のデータは凄く有用ですが、かなり費用がかかることもあって、どうすればサスティナブルにデータを共有しながら街づくり戦略に活かしていけるかというところが、これからのミナミの課題ではないかと思っています。

その辺りについて課題意識は持っていますが、まだ私たちも解けていないので、これについて中塚さんから良いアイデアがあれば教えてください。

中塚　そうなんですよね。実は第２部の方もいろいろな方にデータをご紹介いただきますが、それぞれ個別に取っています。

実は、先ほど外国人客の話がありましたが、インバウンドの方は関空から来られるので、当然、鉄道を利用されます。それで京都に行ったりされるので、メトロさんや南海さん、JR さんなどいろいろなところとデータを共有できるプラットフォームが要るんじゃない

かという意見が先ほど絹原から説明があったような研究会でも出ています。

それぞれの企業がデータを取るとなかなか共有できないんですが、その点、海外はどういう形でデータを上手く共有化し、皆でそれを使っているのか知りたいところです。今回、吉村先生が東京から来られるということで、バルセロナではどうしたのか、私たちも聞きたいと思っていたところです。

吉村　オープンデータの重要性ということですね。やはりデータというのは、今後は囲い込むのではなくてオープンにすることが大事だと本当に思っています。

これはビジネスモデルが変わってきたとしか言いようがないのですけれども、今までは企業さんが囲い込むことによって利益につなげるという考え方で、それが有益だったんです。しかし今海外では、日本でもそうかもしれませんが、オープンにすることによってより自分のところにもアドバンテージが来るという流れに変わってきていると思います。逆にそうしないと波に乗り遅れてしまって、それこそディスアドバンテージしかないのは明らかだと思うんですよね。

そのときに重要なのは、やはり共通基盤のプラットフォームと言われるもので、そこでデータを管理して、「この規格でデータを出してください」と指示して統一を図るなど、そういうことが今後は重要になってくるのではないかと思います。

ただ、やはりデータはプライバシーの問題が付きものなので、そこはきちんとしなければならないし、そこを怠ると市民の皆さんや商店街の皆さんの信用を失います。やはり、バルセロナや他の成功しているところは、その点をきちんと押さえていて、その上で「こんなにアドバンテージになるから、皆さん協力してください」という形で提示されているのではないかと思います。

嘉名　ありがとうございます。この辺りの取り組みは、大阪あるいは日本全体がまだこれからというところがあるかもしれませんが、やはりこういうことをベースに街づくりを進めていくことが、これからのスタンダードになるのではないかと改めて思います。

メルボルンにあるペデストリアンカウンティング・システムは、誰もがネットでメルボルンのダウンタウンエリアの人通りのデータをリアルタイムで見ることができるという仕組みです。イベントをするとどのように人が増えるのかとか、店舗が変わったことで人通りが増えたとか、そういうことが全部わかるようになっているんですね。それがわかると、それこそ吉村先生がバルセロナでされていたこともそうかもしれませんが、理解も得られるし、そういう流れにつながっていくと思います。

こういうことが基盤としてあると、ミナミもこれからどうやっていけば活性化につながるのか、もっと長く人がいてもらえる街になるかという議論ができるのではないかと思います。

ぜひ大阪でも、ミナミでもこういうことをしたいと思います。大阪市に都市生態学庁を作っていただけると一番いいと思いますけれども（笑）。

――ミナミは何を目指すべきか

嘉名　盛り上がっているうちに終わりの時間が迫ってきましたが、もう一つだけ皆さんとお話ししたいと思います。

　我々がこれからもデータを取りながら、御堂筋の空間再編が進んでいくとともに、周辺の街づくり、街の活性化も併せて実現していきたいと思っているんですが、大阪全体で言うと、二〇二五年に大阪・関西万博が開催されます。そのタイミングで世界中からたくさんの人が大阪を訪れるので、そのきっかけに、やはり大阪という街がこれからどうあるべきか、あるいはミナミがより魅力的で回遊性が高く、長く滞在して楽しんでもらえる街となるよう、どのようなところを目指していくべきか、いわゆる万博の期間中、ミナミであっと驚くような何か新しい街づくりができないかというのが一つです。

　もう一つは、中長期的でも結構なんですけれども、御堂筋が歩行者空間化されるということもありますし、ミナミ自体がこれからもっと休める場所、おもてなしのゲートとして、歩きやすい、歩いて楽しい街を目指したときに、どのようなことをしていけばいいのだろうかということです。

　二〇二五年までにどうすればいいかということと、もう少し中長期的でもいいので、ミナミが目指していくべきことはどういうことが考えられるのか、ぜひ地元のお三方からコメントをいただければと思います。千田さんからよろしくお願いします。

千田　まず、お願いがあります。それはデータの統一化という中で、キャッシュレス化とか、Wi-Fi とか、デジタルアプリとか、統一しない限りは海外から来られた人をもてなすときにまともなことができないと思いますので、それを行政さんにやっていただきたいと思っています。

　私たちとしては、せっかく行政さんが御堂筋の側道を拡張し、なんば駅前を広場に再編されているので、このなんば駅前広場に来たら、すべての情報が集まるような、西日本のハブという形で位置づけるような街づくりをこれからしていきたいと思っています。

嘉名　ありがとうございます。では、菊地さん、よろしくお願いします。

菊地　なんば駅前広場、それから御堂筋の歩道整備は、なんば、ミナミにとって歴史の一つとなる事業なんですが、これもあくまでミナミにとってはポイントに過ぎないと思います。やはりなんば駅前広場ができて、空間再編事業が行われる中で、先ほど先生が言われたように、これからしっかりとデータを取って、この空間再編事業が街全体に波及し、買い物に来られる方や、もちろん住んでおられる方、それから 25 年万博で世界中から大阪ミナミのまちに来られた方に対し、「大阪らしい、いい街になったな」と思ってもらえるようにならなければいけないと思っています。これをスタートに、ミナミエリア全体にこうした公共空間の再編が拡大してほしいと思います。先ほど述べたように東西筋やもちろん他の南北筋、商店街だけではなく、エリア全体にまだまだ改善しなければいけない場所があります。それがしっかりと面としてなんばエリア、大阪のミナミエリアというところで

「大阪らしい」「上質な」街づくりにつながっていけばと思っています。

25年に向けては、今、街の中でも「万博会場に行くよりも、ミナミに来た方が絶対に面白い」と思ってもらえるよう、「一日で大阪のすべてを満喫できる街がミナミ」と言われるように、自信をもって日頃から街に携わっています。もちろん短期的には二五年に向けて、街のある面の魅力を創造していきますが、やはり一番は長期的に、一〇代、二〇代の方に街に対する思いを育んでもらいたいということです。私もこのミナミの街で生まれ育ちましたが、小さい頃から「楽しいな」「いい街やな」「面白い街やな」と感じてきました。今は四〇代後半ですが、五〇代、六〇代になっても「街が良くなるために、何か協力しないといけない」という思いを持つには、やはり若いときに街にどう携わっていたか、その街をどう楽しんでいたかというところが、人間の本能的な部分でパワーになるのではないかと思いますので、長期的にそういう若い方々が楽しんで、魅力に思ってもらえるような街づくりを進めていきたいと思っています。

嘉名　ありがとうございます。では、中塚さん、お願いします。

中塚　お題を先にいただいたので、どうしようかと思ったのですが、海外の事例で話をさせていただくと、二〇二〇年のドバイ国際博覧会で面白かったのが、やはり街なかのパブリックアートでした。一九七〇年の大阪万博も、やはりパブリックアートとして「太陽の塔」が残っていますし、シカゴもパブリックアートが凄く魅力的で、夜の回遊性とかいろいろなものを作っていると感じます。

それで、これに対抗する大阪のパブリックアートを考えたときに、それはアヒルちゃんかと言うと、そうではなくて「誰かいるぞ」となりました。それが道頓堀のグリコの看板のキャラクターで、彼が二〇二五年に踊ったり、走ったり、いろいろなことをミナミでやってくれると、これは世界が驚くと思います。

一方で、ルイ・ヴィトンと草間彌生さんが東京の街をジャックしましたが、これは企業が費用を負担して行った新しい取り組みです。

では、大阪では何と何でジャックできるのかと考えたのですが、多分、既存の御堂筋や道頓堀やいろいろなところの企業と連携すると思いますので、半年間、面白いことでジャックしながら、「こんなことをやっているぞ」という形で遊んでみたいと思います。

二〇二四年にパリでオリパラが開催されますが、彼らは新しいものを作らずに、セーヌ川という既存のものを使って開会式をすると言われていて、これを世界に発信するのはさすがにパリだと思います。

では、ミナミ、御堂筋は二〇二五年に何をするかというと、パリ・シャンゼリゼを超え

て世界を圧倒するような、例えば、歩行者天国は警察との協議などでいろいろと大変ですが、地元や大阪市さんにも頑張っていただいて、それを何日かできないかと思っています。そこにアートやいろいろな食や文化などがゴチャゴチャに混ざり合った、そういうものをミナミから発信できたらいいと思っているところです。

嘉名　ありがとうございます。冒頭に、今私は御堂筋協議会の座長をさせていただいていると話しましたが、これは沿道のまちづくり団体さんや地域の協議会さんや大阪市さんなど、御堂筋沿道の活性化に取り組んでいる人たちが集まっているところで、実は昨年の夏に万博のワーキンググループができました。ですから、ぜひこの二〇二五年大阪・関西万博のタイミングに、御堂筋で新しい何かができないかと思っています。警察協議などありますから、まだ何になるかはよくわかりませんが、未来の御堂筋の姿を可視化するような取り組みを何かやってみたいと考えています。

中塚さんが用意されたイメージ写真はシャンゼリゼですが、シャンゼリゼは、六年くらい前から月に一回、第一日曜日に締め切って歩行者天国にするという取り組みを始められています。同じように、単純に御堂筋の真ん中を歩いてみたくはないですか。凄く素敵な景色が見られるんじゃないかと思うんですよね。そういう景色をぜひ作りたいと思っています。

それでいろいろと考えているんですが、御堂筋の空間再編、道路再編を行うときは、やはり周りとの関係が大事になります。菊地さんが言われていたような取り組みで言うと、戎橋筋と御堂筋、あるいは宗右衛門町なども含めて東西方向に人が動くような街を目指したいと思います。そうすると、東西の道をいかに通ってもらえるか、楽しんでもらえるかというプロジェクトをぜひミナミ全体の活性化の中では考えていきたいですし、それが重要かなと思っています。

それから、実は御堂筋に今回ベンチを置いたんですが、物凄い稼働率で大いに使っていただいて好評をいただいています。これもデータでわかってきたことですが、意外とミナミはパブリックな所で休めるところがないので、やはり街の中でもう少し座れる場所を増やしていくといいかもしれません。後から怒られるかもしれませんが、例えば「グランド花月」の前は広場にしてもいいんじゃないか、という話もしていますし、もう少し人が居ら

れる場所、街の中の居場所として広場を作っていくようなこともやっていくと、なんば広場もできるので、そういう休める場所のネットワークみたいなことが進んでいくかもしれないという議論もしています。

これはまだこれから地域の皆さんとも話し合いをしながら決めていくことだと思いますが、そういうことを社会実験でやってみて、データを取って、「これは上手くいく」と判断したら本格実施するということで、面的に進めていけたらと思っています。

先ほど吉村先生からご紹介いただいたように、大阪はまだ、吉村先生がバルセロナに行かれて最初に取り組まれたグラシア地区の段階かもしれないですね。だけど、その先にはバルセロナ全体の歩行者空間化という、before-afterがありますので、そういう将来像を大阪全体で私たちも描きたいと思っています。ですので、ぜひともこういうトライアルをこれからも継続的に進めていきたいと思いますし、そのことがミナミの活性化につながっていくことを、皆さんと一緒にぜひ目指していきたいと思います。

最後に、吉村先生から全体についてのコメントをいただけますでしょうか。

◆　最後に：講師からのコメント

吉村　ありがとうございます。今日は皆さんの取り組みであったり、将来の展望であったり、熱意だったり、そういうものがひしひしと伝わってきて大変勉強になりました。

中塚さんが言われたように、やはり万博が開催される二〇二五年に「世界がアッと驚くようなことをやる」というのは本当に大切だと思います。このミナミのエリアはそれくらいポテンシャルがあるのではないかと思いますので、ぜひやっていただきたいですし、私ももし力添えできることがあればお願いしたいなと思っています。

それから、菊地さんが言われたのは愛着ということで、それは本当に大事だと思います。街を良くしていく、エリアを良くしていく原動力としては、やはりそこに愛着を持っている人たちがいて、それを感じているからこそ一緒になって育てていく思いがあると思いますので、そういうものをいかに育てていくかということが、中心的な課題ではないかと思いました。

また、千田さんが言われたデータの共通性については、それを官と民で一緒になってやっていくという視点が重要ですね。市がきちんとビジョンを示して、私としてはリーダーシップをとって引っ張っていけるといいのではないかと思っていますし、私たちの言葉で言うと「産官学民の連携」が非常に大事になります。「産」は産業、「官」はパブリック、「学」はアカデミックで、ここに「民」つまり市民の皆さんが入るんです。この四つの分野が一緒になって目標に向かっていくと街が良くなっていくことはわかっていますので、ぜひ大阪でもそのような取り組みを、仲良く、和気あいあいと楽しくやっていただければいいのではないかと思います。

今日はありがとうございました。

嘉名　盛り上がってきたところですけれども、パネルディスカッションはここで一旦締めさせていただきたいと思います。大変申し訳ございません。

今後とも、大阪の街づくり、あるいは御堂筋、ミナミの活性化に向けて、データを共有しながら皆さんと一緒に考えていきたいと思いますので、今日は終わりではなくて、むしろ始まりだと思っていただいたらいいと思います。引き続き、よろしくお願いいたします。

パネリストの皆さん、本当にどうもありがとうございました。

絹原　嘉名先生、パネリストの皆様、ありがとうございました。

■ 閉会

絹原　それでは、第1部の閉会に当たりまして、大阪市建設局長の渡瀬誠さまにご挨拶をいただきます。お願いいたします。

大阪市建設局長　渡瀬　誠　氏

皆さま、改めまして、本日はどうもありがとうございました。建設局長の渡瀬でございます。

本日は、地元の皆さんがこのように活動された内容を共有していく場を設けられたことに対し、ますは敬意を表したいと思います。

なんば地域と言わず、大阪市の中心部は、吉村先生は仲良くされているというイメージを持たれていますが、実は少し昔はそういうことでもなかったかもしれません。それぞれの方が独自性を発揮して街づくりに取り組んでこられたという時代がありました。

今から一〇年くらい前に、とある方が私のところに来られて「御堂筋を活性化したい」という相談をされました。そのとき、私は「横と仲良くしてください」それから「御堂筋から一つ中に入られた横道の方とも仲良くしてください」「そうしないと、大阪市はなかなか付き合いにくいです」というお話をさせていただきました。

それから一〇年経って、このような状態になっているとは、実を言いますと、その当時は夢にも思いませんでした。そのような一〇年前だったという風にご理解いただければいいかと思います。

今日は地元の方にこのようにたくさん参加していただき、ｗｅｂでもたくさんの方に見ていただいておりまして、このようなことをできたことは、まず今の成果としては第一歩だと思います。

さらに、今日はデータという話を付け加えて、また一歩を踏み出そうとしている時期だと私は理解しております。

私はまちづくり、都市計画が元々専門で、30年ほど前、係員のときにあるところで区画整理をしようとしたのですが、将来の姿に物凄い反対運動が起こりました。それで、どうしたら理解していただけるかと思い、皆さんに「将来どのような色、どのような屋根の、どのような家を建てたいですか」というアンケートを取って、それを全部ＣＧ化しました。そういうことをやったわけですが、意見を聞いて、それを可視化するのが当時の限界で、あとはまちづくりと言えば、気合と人情だけでやっていたわけです。

それがここにきて、ビッグデータという名前で新たなツールが出てきました。これを上手く使うことによって、まちづくりにご理解をいただくというのは行政の立場ですが、そういうまちづくりをすることによって、まちがどのようになっていくかを、吉村先生からご説明いただいたような内容で、理解できるような時代になってきたということです。これは本当にまちづくり屋にとっては物凄いことだと感じているところです。

こうした活動はずっと続けていくべきだと思いますし、今暖かい言葉と私は受け取りましたが、大阪市に対して「きちんとリーダー

シップをとれ」という話です。大阪市の人はまちづくり部局をご存じだと思いますが、他の部局もありますし、建設局は大きな所帯で人もたくさんいます。皆忙しくしていますが、可能な限り、皆さんと一緒に街を作っていくことに建設局としては取り組んでいきたいと思っていますので、このような仲の良いと言いますか、地域の皆さんが面的に一緒になって取り組むということを引き続きお願いいたします。私たちも付いていくことをお約束したいと思います。

最後から二つ目のお話になりますが、こういう中で、実は、国土交通省に歩行者利便増進道路という新たな制度を作っていただきました。これも大阪市から「こういう道路づくりからスタートしたいが、いろいろな制約がある」という話をさせていただいたところ、制度を作っていただいた次第です。ここに改めて感謝を申し上げますとともに、制度の使い方としてはまだ道半ばのところがございますし、道路を使って活性化していくというテーマが残っていますので、引き続き取り組んでいきたいと思っております。

最後に、今日特にｗｅｂで見ていただいている方々にお願いがあります。今日はこのようにｗｅｂで紹介させていただきましたが、ｗｅｂというのは便利なようで、ちょっと厄介な面があります。それは、ｗｅｂで見られるからという理由で出張してくれなくなるということです。今日の皆さんも、もしかするとこれで出張を止めてしまうかもしれません。

実を言うと、来ていただくともっと細かいところがわかったりもしますので、ぜひ今日のお話を聞いて、言わばカタログを見ていただいたという風に思っていただければと思います。本当のことは来ていただかないとわかりません。それも一泊してください。一泊すると、今日中塚さんからもお話がありましたが、夜の街を見ることができます。やはり昼の街、夜の街を見ていただき、体験していただくことによって、全国にこのような街づくりが進んでいくといいと思っていますので、ぜひ皆さん、大阪を体験しに来てください。そうお願いさせていただきたいと思います。

第１部はこれでお開きになりますが、第２部はフレッシュな感じで行われるようですので、引き続きよろしくお願いいたします。まずは中締めということで、ありがとうございました。